

蓮華寺・紫雲寺

下野国分寺近くに思川が流れている。思川は小河川である姿川と合流し、渡良瀬川に出会い、そして利根川に呑み込まれる。思川といい姿川といい、ロマンに満ちた川名であるが、そこに女の悲しい性を伝える身の毛もよだつ伝説が残っている。

思川沿いに大光寺という村がある。この村に兵部という者がいた。兵部の妻は働き者で、男勝りの評判が高かったが、性格は強欲で嫉妬深かった。兵部は次第にそんな妻を嫌い、他に女を囲うようになった。嫉妬深い兵部の妻が夫の心変わりに気づかないわけがない。

ある夜遂に怒りが爆発、夫を打擲(ちょうちやく)した。兵部は妾の家に逃げ込んだが、妻は執拗に追いかけて、怒気の余り夫の喉許に噛み付き、さらに憎き妾を押し倒して喉を喰い裂いて殺したのである。

顔面を血に染めた妻は、息絶えた夫と妾を見て嬉しげに笑った。気がふれたのだ。妻は髪振り乱してあちこちを狂奔したが、喉の渴きをおぼえて、水を飲もうとある川淵に身をかがめた。

水面に浮かんだ妻の姿は、頭に角が生え口が耳元まで裂け、鱗が逆立つ恐ろしい大蛇になっていた。この妻が姿を映した川を、里人は「姿川」と呼ぶようになった。

大蛇に変じた妻は大光寺村に戻り、

「女という女を取り殺してやる。」

と、憤怒の思いを抱いて近くの川底に身を沈めた。その川が「思川」である。それからというもの、思川を渡る女はみな川底から現れる20尋の大蛇に喰われた。里人は大蛇の怒りを鎮めようと、毎年9月8日の夜に生娘を生け贄にすることを決め、籤に当たった一人が人身御供とされることになった。

ある年、大沢友宗という神主の美しい一人娘が籤に当たった。友宗は神に祈りお祓いをしたが、大蛇済度の効験なく、いよいよ当日が近くなる。友宗は最後の頼みとして、この里に教化に来ていた親鸞に、娘の救済を必死に頼んだ。そこで親鸞は娘に説いた。

「前世の業つたなく、今の災難は逃れ難し。弥陀如来の悲願をただ心に信じれば、悪蛇に喰われようとも、浄土に往生する。ただただ念仏すべし。」

当日、娘は生け贄の壇上で端座合掌し、ひたすら念仏を称えていた。夜半、激しい風雨の中、大蛇が現れ、紅の舌を燃やして娘を呑み込もうとした。しかし、娘の口から漏れる念仏に大蛇は力がくじかれ、そのまま水底に沈んだのであった。

親鸞の説く念仏の仏力に帰服した里人は、改めて親鸞に大蛇済度を頼んだ。親鸞は思川の畔に草案を結び、小石に三部経を書いて淵に投じた。

「蛇身ながら経文功德を得て、仏の心を受くべし。悪逆の者こそ浄土の正客、弥陀如来は成仏を誓いたり。」

そして7日7夜三部経を読誦すると、遂に大蛇は川井兵部の妻の姿となって現れ、仏の心を得たと述べた。翌日、大蛇は水上に姿を現し、西の空からたなびく紫雲に乗るや、菩薩に変じて往生を遂げた。

この時、虚空より蓮の花が舞い散ったことから、この地を花見ヶ岡といい、親鸞が結んだ草庵は蓮華寺と紫雲寺となり、現在に至っている。(武田鏡村)